

東アジアと中央アジア —キルギスに行って考えたこと—

キルギスが日本文化のルーツであるという栗本慎一郎氏の著書『シルクロードの経済人類学』を読んで以来、キルギスに強い関心を持っていたが、そのキルギスに昨年JICAの仕事で訪問する機会を得た。キルギスを含む中央アジアは、古代よりメソポタミア、ギリシャ、インド、中国などの文明が流れ込み「文明の十字路」と呼ばれてきた。また、インドから東アジアに仏教が伝わったルートでもあり、シルクロードを通して東西文明をつなぐ重要な地域であった。

キルギスは中国のすぐ西に位置する人口5百万人程度の小国であり、天山山脈を望む自然豊かな国である。かつてソ連邦に属していたが、ソ連崩壊後に独立し、欧米や日本の支援を受けて市場経済化を進めた。キルギスは当初「改革の優等生」と称され、旧ソ連では最も早く97年にWTOに加盟したが、汚職問題等による政治的混乱もあって経済は低迷し、農業においても集団農場解体後、資金不足によって農業機械の更新が進まず生産の停滞が続いた。

こうした状況は旧ソ連のほとんどの地域で起きたことであったが、ロシア、カザフスタンなどの資源国は資源価格高騰によって経済は次第に回復軌道に乗り、それに伴ってロシアと中央アジアの地域間協力が進展し、2000年にユーラシア経済共同体、10年にロシア、カザフスタン、ベラルーシによる関税同盟が結成された。また、中東問題を背景にこの地域に影響力を増しつつあった米国に対抗して、01年に中国、ロシア、中央アジア諸国をメンバーとする上海協力機構が結成され、現在ではインド、イラン、パキスタン、モンゴルなどの国もオブザーバーとしてこの機構に参加している。

ソ連崩壊以降、アフガニスタン、イラクなどで紛争が続くなかで、そのすぐ背後にある中央アジアは地政学的に重要な地域であり、特に新疆ウイグル自治区を抱える中国にとっては、中央アジア諸国と良好な関係を保つことは内政問題に直結する重要な課題になっており、昨年、習近平中国国家主席は中央アジア諸国を歴訪し「シルクロード経済ベルト構想」を打ち出した。

日本政府も中央アジアの重要性は認識しており、独立当初からODA等による経済支援を行い、04年より「中央アジア+日本」対話が続けられてきた。しかし、90年代後半に日本人が殺害されるテロ事件が起きたこともあり、残念ながら日本は中央アジア諸国と緊密な関係を構築するに至っておらず、先方の日本への期待が高いにもかかわらず、中央アジアに対する日本国民全体の理解は不十分なものとどまっている。

戦後の日本では、多くの国民が国際関係を米国を中心に考える性向が染みついているが、世界の枠組みは近年大きく変化してきており、「ユーラシア」という観点から世界地図をもう一度見直してみる必要があるだろう。

((株) 農林中金総合研究所 基礎研究部長 清水徹朗・しみず てつろう)